

## サンディエゴ計画に関わった寺沢福太郎と吉田俊二

リオグランデ下流域が静かになり二月が経過した1915年の暮れ、サンディエゴ計画に加担する日本人の募集がメキシコ市で行われていた。勧誘された一人は、この反乱に参加した日本人で唯一手記を残した吉田俊二、募集したのは寺沢福太郎である。<sup>80</sup>

ウエルタがマデロ大統領とピノ・スワレス副大統領を暗殺してから数ヵ月後の1913年半ば、三井物産はウエルタ軍に日本製小銃七万五千丁の売込みに成功していた。その武器受け取りのために日本を訪れていたメキシコ軍高官の一人に、エミリオ・グスタボ・アレマン少将・陸軍技師がいた。吉田俊二は将来事業を計画していた父親の意向で、和歌山中学を二年で中退し、アレマン家で住み込み小使をしながらスペイン語の勉強をすることになった。間もなく不幸にして父親が他界したため、任務を終え帰国するアレマン少将一家に伴ってメキシコ行きを決意した。<sup>81</sup>

アレマンの家族と吉田は1914年（大正3年）8月2日、東洋汽船南米航路の紀洋丸で横浜を出帆した。その二日後、日本がドイツに戦線布告を行い、戦時下、紀洋丸はハワイのヒロで待機を命ぜられ、十月ごろに静洋丸へ転船し、12月14日、四ヶ月と十四日の航海の末やっとオアハカ州サリナ・クルスに到着した。接岸後二時間ほどしてカランサ軍将校が七八人の兵を連れ、アレマン少将の引渡しを求めた。船長は彼らを待たせ、アレマンから状況説明を受けた。彼と家族に危険が及ぶことを知った船長は断固として引渡しを拒否し、たまたま同港に碇泊していたエルサルバドルの貨物船と交渉し、夜のうちにアレマン一家を移した。中米へ脱出したエミリオ・アレマンは情勢が落ち着いてからカランサに重用され、弾薬製造工場の責任者になった。<sup>82</sup>

一人でサリナ・クルスに上陸した吉田少年は十五歳「テキサス州独立運動に参加した日本人」と題した手記を書いたのは入国から五十五年経た1969年、七十歳の時であった。1915年12月12日、入国から一年余り、日本政府がカランサ政府を正式に承認した同じ月、彼は他の五人の日本人とロンドン＝メキシコ銀行で夜警の職についていた。そこへやって来たのが寺沢福松（福太郎）であった。寺沢は次のように言った。「実は私はカランサ将軍の参謀の一人で親友の少将から・・・目下テキサス州で独立運動が盛んに起っていて、その運動の首謀者がカランサ将軍へ内々で武器の援助を頼んできている。カランサ将軍も承知をして内諾を与えたから、近々テキサス州へ武器を運ぶことになっている・・・日本人が非常に勇敢だと言うことを知っており、又アメリカ人が君等を侮辱しており、アメリカでは日本人を虐待しているのだから、君等日本人がメキシコ人と協力して米テキサス州独立運動を援助してアメリカ人に一杯喰わしてやろう・・・それで君ひとつ日本人を集めよ、と言う事であり又内々では日本人には日当三弗か五弗かよく覚えていないが其れ位支払う用意もあるらしい。それで君らの内に若し行きたい希望者があれば僕のところへ通知してくれ。」<sup>83</sup>

寺沢は「日墨交流史」によると愛知県出身、1906年、熊本合資の監督としてラス・エスペランサ炭鉱に入ったとされている。その後コアウイラ州シウダー・ポルフィリオ・ディアス（現在ピエドラス・ネグラス）のメキシコ軍兵営内でメキシコ兵相手の食料品店を経営していた。<sup>84</sup>

又「日本人メキシコ移住史」は長野県出身の小野清長が寺沢について語った内容を次のように伝えている。「カランサ政権時代、つまり1917から1920年までの間にはチワワにいて、奥さんの弟が警視總監で、自分も一等刑事の待遇を受けていたという。日系人社会でもたいしたものだった。」<sup>85</sup>

一方、移住研究第14号に掲載された国本伊代の論文「メキシコ革命と日本人移民（1910-1917）」によると、1915年11月、寺沢福太郎が金沢市に住む友人日下部富蔵宛に送った手紙が加藤高明外務大臣へ転送されている。内容はカランサ政府が日本政府の承認を早急に求めていること、そして、日本政府にその意思があるのであれば、日本のために有利な密約でも公約でもさせる、と言うものであった。これを受け取った外務省は在墨日本公使館に寺沢なる人物の照会を求めた。これに対する回答は、寺沢がカランサの内務大臣兼外務大臣の旧来の知人であり、縁故により顧問格とかの名義で少なからざる手当てを受けており且つ政府の機密に参与しているらしいと報告した。国本伊予は当時の内相兼外相はヘスス・アクニャのことと推定している。<sup>86</sup>

吉田俊二と同僚たちは話し合った結果、相棒の牛島と、名前を思い出せないもう一人の三人で行くことにした。間もなく寺沢から翌年1月2日午前7時、プエナ・ビスタ停車場へ身分を明かさ書類は一切持たず、着替え一着で集合するよう連絡があった。停車場には日本人七八人とメキシコ人十五人ぐらいが既に集まっていた。この中に西村、児玉ともう一人の日本陸軍の将校がいた。児玉は有名な児玉大将の甥だということであった。寺沢は三人の日本人を連れてきて、指揮官としてマウリリオ・ロドリゲス・ソリス中佐を紹介した。ラレド行きの一等客車に乗り、途中サルティヨで更に四五名の日本人が加わった。モンテレーを過ぎて北へ北へと進みゴロンドリナという停車場で降ろされた。駅の周辺には人も住まない寂しいところで、停車場の建物がこの辺り唯一の建造物で、メキシコ人数人倉庫の中から出てきた。そこで暫く過ごすことになった。中には食料もあり、ウインチェスター小銃と弾丸百発の支給を受け、翌日には馬も割り当てられた。<sup>87</sup>

この頃モンテレーでサンディエゴ計画の主だった指導者が集まっていた。それらはバシリオ・ラモス、アグスティン・ガルサ（別名レオン・カバヨ）、ルイス・デ・ラ・ロッサ、アニセト・ピサニャである。彼らは合議の結果デ・ラ・ロッサを新しい指揮官に任命した。それまでは憲政軍マウリリオ・ロドリゲス中佐が暗黙のうちに指揮官を務めていた。ロドリゲスはモンテレーにある中央鉄道管理室の重要なポストにいて、サパタ軍討伐作戦でモレロス州にいたジェネラル・パブロ・ゴンザレスとタンピコのジェネラル・ナファラテの

間の連絡役を務めていた。これら憲政軍北東師団の高官が関わっていたため、サンディエゴ計画はカランサが仕組んだと信じられていた。<sup>88</sup>

1913年2月下旬、ウエルタがマデロを殺害して政権を握るや、カランサはパブロ・ゴンザレスをコアウイラ州軍の総司令官に任命した。カランサは7月、トレオン攻略に失敗してからソノラに一先ず落ち着き、自分の出身地コアウイラを含む北東部一帯を全てパブロ・ゴンザレスに一任した。コアウイラ州のカランサ軍はウエルタ軍に追われ、ついに国境の町ピエドラス・ネグラスを最後の拠点にしなくてはならなかった。

「日墨交流史」によれば、寺沢はこの町で食料品店を経営していた。1914年、馬場称徳から業務を引き継ぎ、北部国境付近の日本人移民の状況を調査した伊藤敬一に情報を提供したのは寺沢であった。<sup>89</sup>

ゴンザレスをはじめとする憲政軍将校たちとの間に緊密な関係が出来た寺沢は軍需物資の専門家としてカランサ軍の中に巧みに入り込んだと思われる。また、寺沢は自分をパブロ・ナゴと呼ばせているのは、ゴンザレスとの親密な関係があることを示したものでなかろうか。

パブロ・ゴンザレスは七歳で孤児となり、十四歳の時には物売りをし、一時期はアメリカで暮らしたこともある。小さいときから努力家であった彼はコアウイラ州の小さな農村でささやかな店を持ち、政治にかかわるようになっていた。フロレス・マゴン主義者であったゴンザレスは1911年、マデロ革命に投じた。カランサがその後一貫してゴンザレスを手元に置いたのは、一筋縄ではいかないアルバロ・オブレゴンに対抗させるため、自分への忠誠心の厚い頼れるゴンザレスを必要としていたためである。<sup>90</sup>

数々の華々しい戦果を上げたパンチョ・ビヤや、ビヤとの戦いに片腕を失ったオブレゴンに比べ、パブロ・ゴンザレスはそれまで一度も、これといった戦果を上げていなかった。そのことを過剰に意識したゴンザレスは失敗を恐れ、何事にも慎重でありすぎたことが最大の欠点であったと言われている。1915年7月11日、ゴンザレスは首都に攻め入り、それまで防衛に当たっていたサパタ軍を追い出した。8日後、ベラクルースからの補給線を確保するためにイダルゴ攻撃に回り首都を一旦退いた後8月2日、再び首都を奪還した。恐らくそれに合わせて寺沢もメキシコ市へ移動したものと思われる。<sup>91</sup>

パブロ・ゴンザレスには多くの日本人の部下がいて、彼の参謀に後藤少佐という人がいたと吉田俊二が語っているが、詳しい事は分からない。ゴンザレスはその後、サパタ討伐の重責を負うことになる。

1月9日、吉田俊二らが待っていたゴロンドリナにマウリリオ・ロドリゲス中佐が現れ、次の町ランパソスでビヤ軍とカランサ軍の模擬戦を行う指示を出した。部隊は二つに分かれ、一方が小銃五発を空に向かって撃ちながら、「ビバ・ビヤ」と叫んで町の中を走り抜け、残りの守備隊は「ビバ・カランサ」と叫びながらその後を追う、というものであった。そ

れから両隊は合流し、国境へ向かうことになった。吉田俊二のサンディエゴ奇襲隊は翌日午後、攻撃組と国境へ物資を運ぶ組に分かれて出発した。吉田は攻撃側に加わった。その夜十二時、隊長に従ってランパソスの町の中央を疾走し、銃を放ちながら「ビバ・ビヤ」を叫んで町を通り抜けた。あたかも実戦のように見えた。しかし、何故このような小細工をする必要があったのだろうか。<sup>92</sup>

12月17日、パンチョ・ビヤは惨憺たるソノラ作戦からチワワ州都に戻ってきた。この前ビヤが帰ってきたときには数百人が駅に出迎えた。この時出迎えたのは十人ほどであった。一万人の兵は僅か二千に減っていた。カランサ軍はチワワへ迫っていた。ウイルソン大統領はビヤの亡命を受け入れる声明を発表したが、ビヤはメキシコから離れようとしないうばかりか、フアレス市攻撃を唱えた。しかし残った二十七人のジェネラルのうち二十三人が反対した。オブレゴンがビヤ自身と弟のイッポリト、それにビヤ政府の三人の民間人高官以外の兵士と将校に恩赦を与えることを表明した。こうしてジェネラル四十人、将校五千四十六人、兵士一万一千二百二十八人が武器を置き、一月初めにチワワ、フアレス両市はカランサ軍に渡った。<sup>93</sup>

ランパソスでの模擬作戦は、北東部でもカランサ軍が制覇したことを宣伝する狙いがあったこと以外には無意味に思われる。ランパソスはヌエボ・ラレドから南東約百二十キロ、モンテレーからも百五十キロ離れた小さな町で、当時の人口は二三百人程度だったと思われる。宣伝工作には余りにも効果が期待できない場所であった。

吉田は隊長の命令により三人の日本軍将校の通訳をした。しかし彼等が何故同行したのか吉田には分からなかった。三人は攻撃作戦終了後キューバに向かったと吉田は言っている。「日墨交流史」は、彼等は単に日本人として日当を目当てに参加したもので、日本軍とは何の関係もなかったとしている。<sup>94</sup>

町外れで合流し、国境を目指して北上した奇襲隊は1月14日あるいは15日の夜、パラフォックスという河岸の町に到着した。そこにはデ・ラ・ロッサが手配した黒人の道案内人が待っていた。残念ながらその後の奇襲隊の行動については分からない。吉田はロドリゲス隊長からの命により、モンテレー市内の受取人へ宛てた書類や手紙を届ける任務を負うことになったからである。隊長は、任務を終えたらパラフォックスで待つように言うと、その夜のうちに部隊を率いて渡河した。

吉田は相棒の牛島と共にモンテレーへ向い、途中牛島をサンチェスというメキシコ人の家に待たせて、ランパサスから一駅ほどモンテレー寄りのビヤルダマという駅からモンテレー行きの列車に乗った。任務を終えると再びパラフォックスに向かい、牛島と二人でメキシコ人の小さな家で待っていた。2月6日頃、使者が来て奇襲隊の帰国を知らせた。部隊はアメリカ側サンベニートの近くで渡河して帰還したため、モンテレーで落ち合うことになった。吉田と牛島はモンテレーからメキシコ市行きの切符と小遣いをもらって、その

日のうちに発った。日当の支払いはなかった。95

吉田の参加した奇襲隊が活動した1月下旬から2月初めにかけて、アメリカ側では目だった事件は報告されていない。ひとつだけそれらしいと思われるのは、2月の初め、小規模な一団がプログレソにあるフロレンシオ・サエンスの農場を襲い一部の建物が壊されたことが報道されているのみである。96

ロドリゲスが攻撃を行っている間、カランサはヌエボ・レオン知事に、モンテレーに居る「テキサス革命」の責任者を全て逮捕するよう指示していた。指名されていたのはガルサ、ロドリゲス、ラモス、デ・ラ・ロッサ、ピサニャであった。知事がロドリゲスの逮捕と監禁をカランサに打電したのは2月3日とあるので、吉田隊の隊長はこの日にはモンテレーに帰還していたのであろう。同時にマタモロスでジェネラル・リカウトがピサニャと四人の同志を逮捕していた。その事は二週間後に明らかにされた。カランサは逮捕に関する一連の情報を全てアメリカ政府に報告していた。97

メキシコ市へ帰って暫くして、日本人参加者は暫くの間各自別々に隠れろ、とのことで吉田らはコアウイラ州サルティヨの先にあるアルテアガに住むダビラと言う人の下に身を寄せることになり、その日のうちにメキシコ市を後にした。この事はモンテレーと同じように、首都でもパブロ・ゴンザレス配下のPSD関係者に対するカランサの取締りの目が向けられたことを示している。同じ日に日本の将校たちはキューバへ行くといってベラクルースへ向かった。98

カランサに狙われたもう一つのグループがあった。パブロ・ゴンザレスの共謀者、ペドロ・エルナンデス少佐は北東軍団本部付きの軍事警察長官で、モンテレーを舞台にPSD志願兵の募集、宣伝ビラの配布、資金集めなどを積極的に行っていた。モンテレーでは革命の推移に合わせて憲政軍の中で無政府主義テハノ集団が形成されていた。カランサは自分の政治生命を脅かす危険性を持つ彼等の動きを、細心の注意を払いながら封じ込めた。

憲政軍少佐で二十一歳のアルフォンソ・ドミンゲスは、友人のマウリリオ・ロドリゲス大佐から「テキサス革命」のことを聞いた。一月の初め、ロドリゲスはドミンゲスをレオン・カバヨ（本名アグスティン・ガルサ）に紹介した。レイノサ出身のドミンゲスは河向かいのヒダルゴにいる親戚を頻りに訪ね、南テキサスの社会情勢を肌で感じていたので、PSDに共鳴した。一月の半ばドミンゲスはカバヨの指示に従って自分が集めた六人と共にモンテレー郊外の農場で待機した。カバヨが送り込んできたのは一人だけだった。カバヨは募集を終えると全員を率いてテキサスに入るようになっていた。二週間待った頃、元ウエルタ派が加わったことを知ったドミンゲスは、憲政派の利益に反すると考え、一同に諮ったうえで中止を決意した。その直後彼等は拘束され、持っていたカービン銃十一丁と実弾千発を押収された。99

カランサが取締りを強化していた頃、ロスアンゼルス治安当局も動いていた。1916年2月18日、連邦法務官とL A市警がリヘネラシオンの事務所に踏み込んだ。リカルド・フロレス・マゴンは机に向かって手紙を書いていた。騒ぎを聞いて部屋に入ってきた弟エンリケは、逮捕に抵抗したため頭をピストルで殴られ、連行される途中病院で手当を受けた。兄弟と、英語版の編集者ウイリアム・オウエンは連邦刑法二百十一条、リヘネラシオンに掲載された淫らな記事を郵送した罪で起訴された。

指摘された三つの論説のうちの一つはPSDに関するリカルドのエッセーで、カランサの秘密情報員がアメリカの官憲にこの記事について注意を喚起した。フロレス・マゴン兄弟の裁判は5月31日に開始され、6月6日、サンディエゴ計画を扇動した理由で有罪の判決を受けた。両者はそれぞれ千ドルの罰金、エンリケは禁固三年、リカルドは一年と一日であった。エンリケは五千ドル、リカルドは三千ドルの保釈金で控訴が許されたが、積み立てる金がなく二人ともワシントン州マックニール島の刑務所で服役した。諸説あるサンディエゴ計画の立案者に関し、ロスアンゼルス連邦裁判所はフロレス・マゴン説をとった。<sup>100</sup>

カランサはサンディエゴ計画の活動家を逮捕したものの、メキシコ中立法違反による裁判は一度も開かれることはなかった。メキシコの刑務所の常で、囚人は易々と脱走し、カランサの成功は長くは続かなかった。メキシコは内戦の混乱で更に無政府状態が広がっていた。

80. 日本人メキシコ移住史編纂委員会、“日本人メキシコ移住史” 1971、P121
81. Ibid. P119
82. Ibid. P120
83. Ibid. P121
84. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990、P408
85. 日本人メキシコ移住史編纂委員会、“日本人メキシコ移住史” 1971、P154
86. 国許伊代、「移住研究」第十四号掲載論文「メキシコ革命と日本人移民」(1910-1917)、P10
87. 日本人メキシコ移住史編纂委員会、“日本人メキシコ移住史” 1971、P122
88. James A. Sandos, “Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923”, University of Oklahoma Press, 1992, P131
89. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990、P408
90. John Womack, Jr., “Zapata and the Mexican Revolution”, Vintage Books, 1968, P258
91. Ibid. P224
92. 日本人メキシコ移住史編纂委員会、“日本人メキシコ移住史” 1971、P122

93. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P533
94. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990, P409
95. 日本人メキシコ移住史編纂委員会、「日本人メキシコ移住史」1971、P123
96. Benjamin Heber Johnson, "Revolution in Texas, How a Forgotten Rebellion and its Bloody Suppression Turned Mexicans into Americans", Yale University Press, 2003, P135
97. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1993, P131
98. 日本人メキシコ移住史編纂委員会、「日本人メキシコ移住史」1971、P123
99. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P132
100. Ibid. P137